
Soul Days

エターナル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Soul Days

【Nコード】

N9319U

【作者名】

エターナル

【あらすじ】

約1000年前、創造と破壊を司る「ソウル」と呼ばれる魔法を駆使し、争いを起こした7人の魔法士たちが居た。

人々は彼らを「破壊の魔法士」と呼んでいた。

彼らは「ソウル」を使い、大地を焼き、空を裂き、世界を破壊し尽くしていた。

破壊の魔法士たちを止めるべく立ち上がった魔法士たち。

彼らの戦いは終わりが見えないほど長い戦いだっただった。

そして破壊の魔法士たちを倒し、彼らの持つ「ソウル」を世界各地

に封印した。
そして時は流れる。
。

〜キャラ紹介〜（前書き）

エタ「久しぶりにこの小説に着手しました。故に文章等が変な感じがするのはスルーしていただけると嬉しい限りです」

エタ「それではキャラ紹介です、どうぞー」

くキャラ紹介く

くキャラ紹介く

蓮^{れん}

5月13日生まれ

17歳

身長173cm

体重56kg

生まれは不明

趣味：のんびりする

好き：剣

嫌い：女（優飛は除く）

夢：のんびり暮らす

性格：無口、女嫌い

座右の銘：世界最強の騎士

生まれた場所が不明の少年。本作主人公。

好きな事は剣で、毎日剣の手入れや素振りなどは欠かさない。

髪型は短髪で、色はエメラルドグリーン。

基本的な服装はロングコートだが、胸元にはベルトが3つほどついている。

アクセサリーは普段は身につけないが、唯一物心がついた時から持っていたネックレスを大事にしている。

両親の生存は不明で、蓮は戦争が起きたせいで両親を失ったのだと思いついて帝国に一方的な恨みを抱いているが、それを表面上に出す事はしない。

剣術の腕前は超が付くほど一流と言われている。

優飛^{ゆうひ}

4月12日生まれ

17歳

身長156cm

体重不明（優飛曰く女の子に体重を聞くのはタブーとの事）

生まれはフィリシア王国

趣味：魔術の勉強

好き：蓮

嫌い：戦争

夢：戦争の無い世界に住む

性格：優しく明るい、そして蓮の事になると頑固になる

座右の銘：蓮とずっと一緒に居る

本作ヒロイン。

生まれた時からフィリシア王国に住んでいるが、帝国との戦争が始まり両親を「ソウル」の被害で失う。

髪型は前は少し長く、後ろはお尻まで届くほど長い。色は金色でところどころ蒼が混じっている。

好きな事は蓮、と言うのも、蓮と一緒に居るのが好き、蓮と話すのも好き、等仲良くなってからは常に蓮の事を考えている。

基本的な服装は一般的なセーラー服だが、服の裾に二つのベルトがクロスするように取り付けられている。

アクセサリーなどは一切身につけず、自分を飾ろうとはしないタイプ。

魔術の腕前は破壊の魔法士たちを倒した魔法士たちをも凌ぐほど。

くキャラ紹介〜(後書き)

エタ「はい、というわけで今日からのゲストは蓮と優飛です!」

蓮「……」

優飛「あはは……、蓮、何か喋らないと」

エタ「しかし、優飛の髪の色はすごいね、金髪に蒼が混じってるなんて」

優飛「これは生まれつきだからね」

エタ「なるほど、まあそれは置いといて、今回はプロローグ投稿となります」

優飛「次回投稿はまだ未定らしいですけどね」

蓮「ダメ作者め……」

エタ「てめ、漸く話したかと思ったら第一声がそれかよ!?!」

優飛「まあまあ……、それではこの辺りで失礼しますね！。それで
は」

〜プロローグ〜（前書き）

プロローグ編ですが、短くてすみません！

舞台背景とこれから起こる事の序章を書けてればいいなあと思いつつ投稿してみます。

くプロローグく

くプロローグく

時は流れ現代。

世界には、大きく分けて3つの国で成り立っている。

フィリシア王国・ジェナスト帝国・クレジオ中立国である。

フィリシア王国とは、国王の名のもと、戦員を育てる為の養成学院がある。

その養成学院には毎年300人以上の志望者が集まるほど有名な学院だ。

財政的にも他国よりも安定している国である。

ジェナスト帝国は、帝国が全てを支配するという国で、かなり戦闘的な国だ。

クレジオ中立国は、一切他の国には味方せず、常に中立の立場を主とする国である。

2年ほど前に、ジェナスト帝国がフィリシア王国に戦争を仕掛け、
現在でも戦争は続いている。^{いま}

互いに「ソウル」を使い攻撃しあう為、その被害は計り知れない。

いや、最早互いの国には被害しか無いと言っても過言ではないほどである。

そんな中、フィリシア王国の養成学院からも戦争へと駆り出される若者も後を絶たなかったが、遂には人手不足に陥り急遽養成学院は新入生を募集した。

しかし、戦争中と「ソウル」によって受けた被害が重なり、養成学院に入る志願者はほとんど居なかった。

そんなある時、一人の少年がこの養成学院へと訪れる。

「蓮」と名乗った少年の背にはバスタードソードと呼ばれる大剣を背負い、刀身全体には肉眼でもわかるほどの強力な風が渦巻いていた。

蓮は迷う事無く歩き受付係の元へ来ると、養成学院騎士課に入ると告げそのまま踵を返しその場を去っていった。

そして蓮と入れ違いに歩いてきたのは一人の少女だった。

「優飛」と名乗った少女もまた蓮と同じ様に受付係まで歩み、養成学院魔法士課に入ります。と告げて踵を返し去って行く。

この時、蓮と優飛が後に世界を揺るがす大きな出来事を中心人物になるとは、誰も気付けるはずもなかった。

〜第1話〜（前書き）

今回の作品は基本的に蓮視点がメインです。

優飛やその他はまちまちになるかな……？多分。

ともかく第1話です、どうぞー！。

〈第1話〉

〈第1話〉

空気が冷たく、もうすぐ冬になろうとしている秋の終わりごろ。

俺は背中に愛用の大剣を背負いただひたすら歩き続ける。

歩く先々で人々が口々に俺を指差し後姿を見送る。

それもそのはず、蓮を背後から見ればその姿は騎士そのものなのだ。

とはいえまだ蓮は騎士としては未熟な位置付けに値する。

服は養成学院で支給された服なのだが、蓮のは特注で作られた服だった。

その理由としては、今まで入校した騎士志望者は、みな腰から剣を提げていた。

しかし蓮は剣を背中に背負うタイプだったため、剣を仕舞う鞘を提げる場所が無いという事が発覚し、特注で作られたとの事だ。

暫く俺は歩き続けると一人の少女が待ちくたびれたように、壁にもたれかかり本を読んでいた。

魔法士課の制服に身を包み、手には恐らく魔術に関する本だろうと思われる本を持っている。

顔つきは少し幼さが残るがなかなか可愛く、後ろ髪はお尻まで伸びるほどある。

「遅いよ蓮、また寝坊？」

俺に気付いた少女が本を閉じ俺に近付きながら声をかけてくる。

本来俺は女嫌いなのだが、この少女だけは特別嫌いになれなかった。

「またつてなんだよ、それに時間通りに来たじゃないか」

俺は反論しながらも苦笑を漏らす。

この少女が言うように、俺は時々ではあるが寝坊したりして時間に遅れる事はある。

しかし実際は、学院から帰ってから俺は休まず毎日4時間は剣の素振りをしたり、手入れを欠かすことは無かった。

それ故就寝時間もまちまちになるが、基本的には夜の12時を過ぎる辺りだった。

「まあいい、行くぞ優飛」

俺が少女に声をかけると、優飛と呼ばれた少女は

「そうだね、行こうか」

笑みを浮かべ蓮の手を握り共に学院へ向け歩き始める。

俺と優飛の出会いは今から3ヶ月前に遡る。

養成学院には知っての通り騎士養成と魔法士養成の2箇所が存在する。

更には毎年一人か二人は特別な部屋へ行く事が出来るが、未だ卒業したという話を聞いた事が無い場所がある。

魔剣士養成。

魔法士養成と騎士養成の二つを卒業した者のみ魔剣士養成へと行く事が出来るが、二つ同時に卒業など並の人間では不可能である。

故に最近では魔剣士養成の部屋には誰も居らず、閉鎖するという話も持ち上がるほどである。

蓮と優飛の教室は分かれてしまいが、1ヶ月に一度騎士養成と魔法士養成の合同授業がある時には優飛がすぐさま蓮の隣を占拠する。

優飛と俺が出会った時はよく優飛から俺に話しかけていたが、俺はことごとくそれを流していた。

しかし、優飛は諦めずに何度も俺に話しかけてくるので、遂には俺が折れる事を選ばざるを得ない程まで執拗だった。

この頃から優飛はもしかしたら俺だけを見ていたのかもしれない。

その日を境に優飛と会話するうちに俺は密かに

(この子には他の子にはない何かを持っている)

直感でそう考えた。

実際、優飛と話しをし始めた頃から徐々にではあるが周りの反応が変化していた気がする。

そんな優飛を見て俺は優飛にだけは心を少しずつ開いていくようになった。

今思い出すだけでもありがたい事だ、と心の中で呟くと優飛の横顔を見てクスッと笑う。

優飛は俺が笑ったのを見ると頬を膨らませ

「人の顔を見て笑うのは酷くない？」

とちょっと怒り気味に尋ねてくる。

「ごめん、優飛と出会った頃を思い出してな」

俺がそう告げると、優飛も納得したようにクスッと笑い

「あの頃の蓮は凄く暗かったもんね、男の子としか話そうとしないしね。」

優飛も3ヶ月前の事を思い出しながら言葉を紡ぐ。

「ああ、あの頃に優飛と出会ってなかったらどうなってたんだろうな」

ふう、と一息つきながら俺も言葉を紡ぐと

「昔の事だからね、色んな意味で懐かしいよ」

優飛が遠くを見つめ昔を思い出すように言葉を紡ぐ。

そんな風に会話を交わしながら歩くこと10分、目的地である養成所へと到着する。

優飛とは学科が違ったため廊下で別れ、俺は教室へ入る。

昔とは違い今では気軽に声をかけてくる友人(?)が居るため軽く挨拶を交わし、自分の席に着く。

特に何をするでも無くただ窓の外を見つめ

(そういえば初めて優飛と出会ったのは合同練習授業の時だな……)

昔を思い出しながら俺は目を閉じた。

〈第1話〉（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回は何気ない日常という感じで表現してみました。

次回は少し時間を巻き戻して過去に触れます。

時間軸としては蓮と優飛が入学して2週間が過ぎた頃、でしょうか。

合同練習授業のシーンを書いてみたいと思います。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9319u/>

Soul Days

2011年10月7日22時06分発行